

## 8月21日（金） 保幼小連携研修会を行いました

小学校教育研究会生活科部と合同で、「保幼小連携研修会」を実施しました。昨年度より、午前に保育園・幼稚園の公開保育を行い、就学前の子どもたちの生活の様子を小学校の先生方に知ってもらい、午後は、保幼小が一緒に連携活動について話し合う場を設けました。保育を知る機会とし、そして、実際に連携活動を実施していただく計画作りに取り組みました。

今年度の公開保育は岡田保育園と舞鶴幼稚園にて行われました。

午後の研修会では木下先生の講義を受けた後、保幼小で1つのグループを作り、各校園の実態を知り、理解を深め、年間の連携活動計画を作成しました。

＜公開保育＞

岡田保育園 9時00分～10時00分

舞鶴幼稚園 10時30分～11時30分

＜研修会＞ 13時30分～16時30分

講演：「生活科を通じた保幼小の連携について」

講師：鳴門教育大学大学院 教授 木下 光二氏

グループワーク：「生活科保幼小連携活動年間計画を作成してみよう」

保・幼・小がひとつのグループになり、それぞれの実情に合わせて生活科保幼小連携活動の年間指導計画をつくってみる。

### 参加園・小学校

永福保育園	朝来小学校
岡田保育園	余内小学校
昭光保育園	岡田小学校
平保育園	新舞鶴小学校
タンポポハウス	倉梯小学校
東山保育園	倉梯第二小学校
ルンビニ保育園	高野小学校
八雲保育園	中筋小学校
やまもも保育園	明倫小学校
うみべのもり保育所	福井小学校
中保育所	由良川小学校
西乳児保育所	
朝来幼稚園	
聖母幼稚園	
橋幼稚園	
舞鶴幼稚園	

## 岡田保育園 公開保育

### 幼児が「何をやりたいか？」をそれぞれが見つけて遊びに向かっている

～木下先生より～

#### 【シャボン玉遊び】

自分たちで液を作り、工夫できるようにと、用具や液の配合について書かれたものが用意してあった。また、一人で楽しむよりも、友達と力を合わせられるようにと用具は大きなものが準備されており、環境設定の重要性を感じた。繰り返しシャボン玉遊びをする中で、大きくするにはどうしたらよいのか？友達とタイミングに合わせたり、体全体を使ってシャボン玉をつくったりする



様子が見られた。その中で、風の向きに気づく子もあり、学ばにつなげる遊びだった。

#### 【園庭の水路作り】

乾燥して硬くなっている園庭に水を流しながら水路を作り続けている遊びも見られた。自分のイメージしていることに向かって、何度も水を汲んできては少しずつ地面をスコップで削っていく。自分が掘った跡を確かめて自身が頑張ったことを確認し、また、掘り続ける。水を流して楽しむ中で普段色水づくりや泡遊びに発展し、使っている園庭に咲く花を浮かばせる子もいた。子どもの日々の経験が他の遊びでも生かされていた。



#### 【赤土を使った泥団子作り】

園庭に水路を作っている遊びのそばで水を含んだ柔らかな赤土を手にして団子作りを楽しむ幼児の姿があった。○や△などいろいろな形を作っている。また、泥が含んだ水の量の違いから感触が異なったり、団子の硬さが違ったりすることの発見をしていた。生活の中で形や数量など自然と身につけていく幼児期の遊びの様子が見られた。



#### 【忍者コーナー】

子どもたちが楽しみにしている行事に夏祭りがある。今年度は「忍者」のイメージを楽しむ、ということで普段の生活の中でも子どもたちは忍者のイメージを持ちながら遊びを展開している。手裏剣を使つて的当て的なゲームをすることを楽しむ姿があった。普段の生活と行事を線で結ぶことで「行事」に対する思いを大きくし、主体的に参加できるように考えられていた。



する思いを大きくし、主体的に参加できるように考えられていた。

#### 【公開保育後のカンファレンスより】

- ◎シャボン玉の液を自分達で作るのはすごい。
- ◎それぞれにやりたいことがあって生き生きと生活していた。
- ◎幼児のやりたい遊びが多様なので、準備が大変だと思った。（岡田保育園より）



◎遊びのルール、生活のルールについては危険なことはしっかりと知らせ、いけないことについても意味を伝えていく。また、どうすればよいのか幼児と一緒に考え合うことも大切である。

◎「～しな」ではなく「～もできるよ」と促しの声かけで自己決定する機会をつくっている。（木下先生より）

◎与えられた遊びをするのではなく、自分がしたい遊びをするために幼児自らが環境に働きかけることができる適当な環境を用意することが大切である。

## 舞鶴幼稚園 公開保育

幼児自身が考えながら遊びをすすめ明日につなげている。

～木下先生より～

## 【年長児の1学期の生活を紹介】

1日の振り返りを大事にして遊び・生活に対する幼児の興味・関心を高めて保育を進める。

## &lt;ザリガニの飼育&gt;

大切に飼育するために保育者と幼児と一緒に考え合い、自分達自身が動き出せるように取り組んだ事例。

ザリガニを飼育する中で友達と飼育の仕方について考え合ったり、当番活動の必要性に気づいたりしていった。

## &lt;キラキラショップ開店&gt;

やりたい遊びで楽しんでいたプラバン製作を活用して、幼稚園の夜祭りでお店を出店した事例。店の名前を決める際に、思いを受け止め折り合いをつけることを経験したり、商品以外のもの（看板や名札など）も

必要なことに気づき、どんなものがお客さんに分かりやすいかのかアイデアを出し合い、作り上げた。



## 【船づくり】

それぞれに作った船をプールで浮かせてみて、自分がイメージしていたことが実現できたか試してみる。予想と違う結果が出た時には、再度作り直す。時には、友達に相談しながら、様々なことを試してみたり改善している姿が見られた。

じっくりと遊びに向き合う時間と空間が保障されており、つまずきに対して保育者が答えを出してしまうのではなく、「なんでかな？」と言葉がけをすることで子ども達が遊びについて考える機会がつけられていた。諦めずに、何度も挑戦していく姿が見られていた。幼児同士のかかわりや話し合いが大切にされている日常が垣間見られた。



## 【公開保育後のカンファレンスより】

◎遊びに対する自分のこだわりが感じられる言葉が発せられていた。

◎生活の流れを分かって自分たちで動き出し、役割を持って行動できる力があると感じた。

（木下先生より）

◎保育者の「次はこれをしましょう！」という言葉で生活がすすんでいくよりも、幼児自身が自ら動き出すことができるようにかかわっていくのがいい。

## 午後：保幼小連携研修 木下先生の講演とグループワーク

## 保幼小連携は互いにとって意味があること（互惠性）

いつもと違う集団の中で自己発揮し、相手の思いを聞き、学ぶ、両方が夢中になる

～木下先生より～

## 【講演：「生活科を通じた保幼小の連携について」

鳴門教育大学大学院 教授 木下光二氏】

◎連携は子ども同士、職員同士が交流すること。職員が互いに幼児・小学生が何を学んでいるのかを理解することができる。互いの教育の理解を深め、発達を知り、子どもの育ちを連続的に学ぶ場となる。

◎異なる集団とかかわり、相手の気持ちに気づくことができる、相手を思いやることのできる機会となるのが連携教育。

◎連携は新たなことを始めるのではなく、実際にやっていることを活用して一緒に活動をしていくと始めやすい。

◎連携活動には幼児にも小学生にも活動のねらいがある。どちらかに合わせてねらいを考えるのではなく、小学生が生活科としてのねらいをもって活動をする中に幼児が参加できる交流になるとよい。

## 【グループワーク】

参加園・校の中で交流活動をしている関係を大事にしながらかグループを作り、これまでの活動内容を振り返りながら年間の連携活動計画を作成しました。互いの教育内容や子どもの実態、園・校の実情を実際に語ることで具体的に活動内容を考え合うことができました。計画のイメージが共有できると互いに実践につなげようとする気持ちが高まっていくように感じられました。



## 園見学・研修（講演・グループワーク）を受けて参加者の感想

## 【園見学について】

◎保育者が主導になるのではなく、子どもに選択させて考えさせることなど、子どもができることは子どもに与える（させてみる）姿勢を真似していきたい。自分で考え、行動する力があり、びっくりしました。

◎環境のすべてが学びにつながっていくのだと知り、驚きました。子ども達が試行錯誤して楽しんで活動しているのが印象的でした。「危ないから、汚れるから」と制限してしまいがちだが、自ら体験して気づくということも大切だと感じました。

◎問題に対して、自分たちで解決しようしたり、話し合いをしたりしているので、小学校での話し合い活動も場面や方法を設定すると可能になると感じました。

◎小学校の準備段階と思われる活動や環境があり、1年生への進学もスムーズに行われる工夫を知りました。就学前に行われていた取組や活動を発展できるように努めなければいけないと感じました。

## 【研修（講演・グループワーク）について】

◎保幼小連携と聞くと、とても難しく大変だと、なかなか積極的には考えられませんでした。他園や小学校の先生達と計画を作る中で楽しくできそうな気持ちになりました。前向きに取り組めるよう努力していきたいと思えます。

◎昨年に引き続き参加しましたが、昨年度よりどの先生も積極的に意見を出し合い、相談し合いながら計画を作成することができて、とても有意義な時間となりました。年々、連携への意識が高まってきていると感じました。

◎小学校がお膳立てをしすぎず、幼児がお客さんにならないように保幼小の連携活動は両方が夢中になる、意味のある活動をしなければならないのがわかった。